

落 原 拾 葉

中村元恒は中村伯先の子で、安永七年本郷（飯島町）に生まれた。大明、中書とも称し、中宗と号した。幼少より家学を受けていたが、伯先は天山の人物を慕い、元恒十五才の時よりついて学ばせ、月六回の講席があったが、三年間山寺から高遠迄三里を通して、一回も欠席しなかったという。

享和元年京都に赴き、医は名医中西鷹山につき、儒も父の学んだ岩垣竜敬や猪飼敬所に師事し、二年帰郷して上穂に開業し、文化五年大出に移った。

元恒は歴史を好み、殊に郷土史に深い関心を持っていた。移り住んだ大出村は、古の落原の庄であったから、その文献を落原文庫と称し、郷土史料の散逸を憂いて其の文献の蒐集校訂に着手し、その図書を落原拾葉と名づけた。巻末に「後の世のかたみの種と思ふまでふぶきの原に拾う言の葉」と題し、それより此の仕事をおこたらず、あらゆる方面の書籍を集めたり、筆写したりした。

四十九才の文政七年、高遠藩主の招に応じ、儒官に任じられ医学館をも督することになり、高遠へ移った。

中村元起は元恒の子で中箕輪村大出に生まれ、通称を忠蔵、黒水、又は半狂と号している。弘化二年、二十七才の時父元恒が職を辞したのでその後を継いで藩の儒官に任ぜられた。

元起は父元恒が計画をして完成を見なかった落原拾葉続編の編集に当たり、百五十巻の偏著に努めたが、その稿が終わらないうちに病魔に冒され、明治十七年六十五歳で逝去した。

中村元恒家の蔵書は一万冊といわれ、元起が弥六の遊学の資とするために大部分は売却したが、まだ千点しかく残っていた、この中には落原拾葉や其の他郷土関係のものが多いので、これを高遠にもたらすことは、心ある者の念願していた所であった。

中村家と交友のあった上島善重を介して、残存図書をことごとく高遠に委託するよう願った、その請を容れられて、昭和五年六月高遠に運ぶことが出来た。